

研究紀要

第21号

黒曜石製石器の产地推定とその様相について
—雅楽谷遺跡と周辺遺跡—

上野真由美 望月明彦

池上・小畠田遺跡の土壙について
—その配置と性格を中心にして—

宅間清公

旧入間用水系下流域の周溝墓と周溝（上）

福田 聖

坂塚古墳群の様相

山本 稔

古墳時代の河川交易
—下田町遺跡へ貝を運んだ道—

赤熊浩一

中世渡来銭にみられる所謂星形孔銭の検討
—北宋の貨幣政策と銭貨化学組成の変動—

清水慎也

中世～近世の地鎮について（下）
—墨書き土器を用いる例を中心として—

鈴木孝之

図書の分類と整理について
—文献データベースの作成—

新屋雅明 金井義直

蓮田周辺採集大珠の鉱物分析

大屋道則

北本市内出土石製品の鉱物分析

磯野治司 斎藤成元 清水慎也 大屋道則

埼玉県内河用砂の鉱物組成について
—胎土分析に関する基礎資料—

大屋道則 清水慎也 横山一己

石器材料及び石器の理化学的分析値（1）
—XRFによる黒曜岩分析値（2005年度）—

大屋道則 西井幸雄 上野真由美 亀田直美
国武貢克 島立桂 田村 隆 望月明彦

2006

財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団





2 clinochlore talc



4 talc



3 clinochlore talc



20 talc



12 clinochlore muscovite



8 quartz muscovite



14 clinochlore



19 quartz celadonite



1 clinochlore



16 augite





13 omphacite



11 jadeite



17 tremolite



6 tremolite



10 jadeite



7 tremolite



18 tremolite



5 tremolite



15 tremolite



9 tremolite



目 次

序

- 黒曜石製石器の产地推定とその様相について 上野真由美 望月明彦 (1)
－雅楽谷遺跡と周辺遺跡－
- 池上・小敷田遺跡の土壤について 宅間清公 (35)
－その配置と性格を中心に－
- 旧入間川水系下流域の周溝墓と周溝（上） 福田 聖 (51)
- 飯塚古墳群の様相 山本 穎 (85)
- 古墳時代の河川交易 赤熊浩一 (91)
－下田町遺跡へ貝を運んだ道－
- 中世渡来銭にみられる所謂星形孔銭の検討 清水慎也 (109)
－北宋の貨幣政策と銭貨化学組成の変動－
- 中世～近世の地鎮について（下） 鈴木孝之 (145)
－墨書き土器を用いる例を中心として－
- 図書の分類と整理について 新屋雅明 金井義直 (171)
－文献データベースの作成－
- 蓮田周辺採集大珠の鉱物分析 大屋道則 (183)
- 北本市内出土石製品の鉱物分析 磯野治司 斎藤成元 (185)
清水慎也 大屋道則
- 埼玉県内河川砂の鉱物組成について 大屋道則 清水慎也 (191)
－胎土分析に関する基礎資料－ 横山一己
- 石器材料及び石器の理化学的分析値（1） (199)
－XRFによる黒曜岩分析値（2005年度）－
大屋道則 西井幸雄 上野真由美 亀田直美
国武貞克 島立 桂 田村 隆 望月明彦

古墳時代の河川交易

一下田町遺跡へ貝を運んだ道一

赤 熊 浩 一

要旨 埼玉県下田町遺跡で発見された古墳時代後期の大溝跡からは、ハマグリなどの海の貝類がまとまって出土した。規模の小さな古墳時代の貝塚である。この貝塚からは、魚骨や獸骨、種子などと、在地産の土師器壺類が完形に近い状態で出土した。これらは、集落内で行なわれた儀礼や祭祀にともなう饗宴のなごりと考えられる。

そこで、本稿では、海の魚介類が内陸の下田町遺跡に運びこまれたルートをテーマとし、「河川交易」をキーワードに検討した。特に、大溝跡から出土した土師器の模倣壺、有段口縁壺、統比企型壺などの土器組成の分析を通して、古墳時代後期の段階に海産物が内陸に運ばれた地域との関係を明らかにし、儀礼祭祀に必要な海産物と、代わりに土師器の食器が、東京湾沿岸や三浦半島にもたらされた現象を「交易」として考えたい。この交易が、経済圏、生活圏、文化圏などを形成し、在地首長の領域圏との関係を解明したい。

はじめに

古墳時代後期における内陸部の遺跡が海産物を手にするためには、そのひとつとして、東京湾につながる河川を利用したと考えられる。

古墳時代後期の集落は、低台地や自然堤防上に基盤をおいて形成されていることが多い。これは、低地の水田開発や大溝開削などによって水の管理が行なわれたことにより、可能となったと考えられる。こうした中で、河川の存在は、集落構成や集落間交流に大きな影響をもっていたことだろう。下田町遺跡（註1）から見つかったハマグリなどの海産物は、河川交易の存在を裏付ける資料ではないだろうか。

本稿では、海産物を出土する遺跡を対象にして、ハマグリによる儀礼や祭祀の問題、土師器壺の領域について検討を行ない河川交易について考察する。

1. 下田町遺跡の貝塚

下田町遺跡の位置する水系は入間川・和田吉野川水系である。下田町遺跡の南側には近接して、和田

吉野川が流れている。本河川の下流は、現荒川の流れと同じくして東京湾まで到達する。中流には、和田吉野川の大里地域、下ると市野川・都幾川の比企地域、さらに下ると越辺川・入間川の入間地域が存在し、各地域は、経済圏、生活圏、文化圏を形成していたと捉えることができる。

元荒川水系には、さきたま古墳群を中心とするさきたま地域が広範囲に領域を形成している。古利根川水系には、さきたま地域と県北部に到る小山川を中心とした北武藏地域の領域が見られる。

さて、下田町遺跡検出の古墳時代後期（7世紀前半）にあたる第80号溝跡からは、多量の貝類・獸骨類・木製品・土器が発見された。

この大溝跡は、遺跡の北側にあたり、覆土中から貝塚を検出した。一方、遺跡の南側には幅5～8mの河川跡が検出され、これが和田吉野川の古い河道の一部と見ることができる。これらの距離は、約350mにおよび集落の南北規模をつかむことができる。

下田町遺跡から発見された貝塚は、海の貝で占め

られ、一緒に、海水魚やイルカといった動物遺存体も発見されている。この地域に、海の物が何らかの方法で、運ばれたことに注目した。

貝種については、第1表にまとめた通りである(註2)。ハマグリ、アカニシ、マガキ、オオノガイは海水貝である。また、チリメンカワニナ、マツカサガイ、マルタニシは淡水貝である。海水貝は、内湾産の貝であることから、東京湾の現海岸線あたりで容易に採取され、搬入されたものであると考えられる。

ハマグリは、殻の左が112個、右が195個を数えた。計測の結果は、第3表にまとめた通りである。また、貝は、左右が検出されていることから閉じた状態で運ばれたと考えられ、調査時においても、合わせたままの貝が存在していたことなどから、貝は生きたままこの下田町遺跡に運ばれてきた可能性を指摘したい。

獣骨類は、馬、牛、中型哺乳類、オオワシなどの大型鳥類、雉などである。また、カニの甲羅や鉗脚(ハサミ)、カエル、魚類の魚鱗(ウロコ)、歯、種鰓蓋骨、下鰓蓋骨、前鰓蓋骨、鱗条(背びれ)を検出した。

木製品は、さらさら状製品、馬歛、曲げ物の底板、紡錘車、槽、田下歛、鋤、平歛、横植、堅作物、案などを検出した。このほか、板状製品、棒状製品、杭なども出土した。

土器は、土師器・須恵器が出土した。土師器の坏類は、模倣坏、有段口縁坏、統比企型坏、高坏、鉢などが出土し、第2表にまとめたとおりである。出土個体数からこの時期の主体的土師器坏は、有段口縁坏、黒色有段口縁坏、黒色模倣坏である。

このほか、出土遺物の中には、甕、壺、瓶などとともに、第5図60・61の高坏、65～70の手づくね土器、68～70の平底の鉢を検出した。これらの土器

がどのような用途に使われたのか明らかにできないが、高坏は供獻用、手づくねは祭祀用、平底鉢は調理用の土器と考えたい。鉢は、底部に木葉痕が見られるものと、未調整のままのものがある。いずれも底部は平底で、肉圧である。整形は、他の土師器に比べ粗雑である。69は、指で押されたままで粘土の積み上げのあとが残ったままである。容量は異なるが、すり鉢のような機能を考えられる。

このように、下田町遺跡から検出された貝塚にともなう遺物を検討した結果、古墳時代後期にあたる7世紀初頭段階でありこの時代の儀礼や祭祀の際に海の幸を入手していたと考えられる。

次に、南側の河川について若干触れてみる。河川跡の覆土や河川跡に流れ込む第762号溝跡からは、古墳時代後期の遺物が検出され、北側で検出した大溝跡の時期と一致する。遺跡南側に検出された河川跡が貝を運んだ河川の可能性もある。第762号溝跡は、箱型に掘りこまれており、底面は平坦な形態で、川から直線的に集落内に引き込まれている。この遺構の規模は、幅2.88～3.46m、深さ46～55m、長さ37mである。この遺構が、当時の船着場の遺構の一部と見ることができないだろうか。護岸や桟橋的遺構は確認されていないが、道路状遺構は、この地点から北側に向かって伸びており、遺跡の基点としての場所がここにあると考えられる。

では、東京湾岸との交流にはどのような実態が存在していたであろうか。

2. 古墳時代に貝を出土する遺跡

(1) 古墳に副葬された貝

『高橋氏文』によれば、「天皇が伊勢に行幸し、めぐり東国に入り、上総国安房の浮島の宮に到る。天皇は、葛飾野にて御狩している間に、浮島の宮にいた磐鹿六雁命(いわかむつかりのみこと)は、白始

第1表 遺跡出土の動物遺存体

	銚切遺跡	小荷谷遺跡	上ノ台遺跡	鬼高遺跡	下田町遺跡
貝類	ハマグリ イボキサゴ ウミニナ スガイ カキ タマキビ アサリ		ハマグリ アカニシ ウミニナ カキ バイ ツメタガイ サルボウガイ オキシジミガイ イタボガキ シオフキ アサリ	ハマグリ カキ ヤマトシジミ シオフキ バイ ツメタガイ イボウミニナ アマガイ	ハマグリ アカニシ ウミニナ マルタニシ マガキ マツカサガイ アサリ チリメンカワニナ
魚類	サメ マイワシ スズキ マダイ クロダイ マグロ サバ コブダイ トラフグ ヒガシフグ	モウカザメ マダイ コブダイ	イサキ マダイ マフグの一一種 コチ ヒラメ	イサキ マダイ マフグの一一種 コチ ヒラメ	魚類 魚類 魚類 魚類 魚類 魚類 鱗 齒 種認證骨 下鋸蓋骨 前鋸蓋骨 背鰭
鳥類	カツブリ ミズナギドリ ウミウ アオサギ カモ類 コガモ ニワトリ ウミスズメ		タンチョウヅル	タンチョウヅル	キジ オオワシ
哺乳類	クジラ ウシ イルカ ノウサギ ネズミ ニホンジカ イヌ イノシシ	クジラ ウシ イルカ	ニホンジカ エゾシカ	ニホンジカ エゾシカ	ウマ ウシ イルカ 中型哺乳類 ハタネズミ ホンシュウジカ
両生類					カエル
甲殻類					カニ フジツボ
爬虫類		ウミガメ			

(ハマグリ) と鰐魚 (カツオ) の二種を捧げて太后八坂媛 (おおきさきやさかのひめ) に献りた。また、そのときに、無邪志國造の祖である大多毛比命 (おやえたもひのみこと) と知知夫國造の祖である天上腹命 (あめのうあらのみこと) と天下腹命 (あめのしたはらのみこと) らと、臍や焼きなどの料理をし、奉獻したところ天皇は大いに嘉賞した」という記録がある。

この文献から、古墳時代後期に、ハマグリやカツオを料理し、献上したことがわかる。

小林行雄氏の「黄泉戸喫」の中で(註3)、古墳時代の遺跡から出土する食物の出土例は少ないが、古墳の中に副葬された容器の中から、動植物の遺存体が出土する実例を紹介し、古くから知られている。

古墳に副葬された蓋壺の容器の中に、ハマグリが検出された例は、福岡県宇野岩木屋の群集墳の中の古墳、岐阜県美濃加茂市古井町二ツ塚の円墳、愛知県犬山市の古墳、三重県名張市長尾七ヶ塚古墳、三重県上野市王塚古墳が知られている。さらに、千葉県木更津市金鈴塚古墳からは、須恵器242個、土師器26個もの大量の土器が副葬され、壺の中から、カラスガイの小片、ウナギ、フナの魚骨が出土し、容器に納められた副葬物を調べることで、当時の食べ物を推察することができるとした。

また、木村幾多郎氏の研究(註4)によれば、九州を中心として57箇所の古墳から供獻食物の遺存体が出土している。副葬されたものとしては、石室内に敷かれた貝類や混入と思われるネズミを除いて、確実に副葬されたと考えられる貝類は14種類である。その中で、ハマグリが23遺跡と最も多く、次にカラスガイ5遺跡、アワビ2遺跡、レイシ2遺跡等である。そのほかに、ウバガイ、シオフキ、オキシジミ、マガキ、サザエ、シジミ等が出土している。

また、小澤重雄氏(註5)は、千葉県内の古墳の

横穴式石室や横穴の内部や棺内に貝を敷く「貝床」の存在について論考した。

「貝床」をもつ東京湾岸地域の古墳には、千葉県千葉市生浜4号墳、山武町塙谷2号墳、成東町駄ノ塙古墳、富津市向原古墳・藤塙古墳・西谷古墳、市原市郡本C号墳、君津市虫神古墳、木更津市金鈴塚古墳、東京都北区赤羽台3号墳などが知られている。また、横穴では、千葉県銚子市赤塚横穴、東庄町今郡横穴、市原市西国吉横穴、富津市向原横穴・大溝横穴・西山横穴・鹿島横穴・高根横穴・加藤横穴・岩瀬横穴、木更津市象ヶ谷横穴、東京都北区八幡原横穴、大磯町庄ヶ久保横穴などがある。

その中で、千葉県大溝第Ⅲ群24号横穴から検出した貝は、総数238点(完形151、破片87)で、このうち、ハマグリが、完形・破片合わせて96点と40.3%を占めている。ほかに、イタボガキ41点で17.2%、ツメタガイ37点で15.5%、以下アカニシ15点、サルボウ8点、ハイガイ7点、バイガイ2点、イボニシ1点であった。

東京湾沿岸の「貝床」を有する古墳や横穴は、6世紀末から7世紀前半のものが多く、千葉県市原市西国吉1号横穴や千葉県富津市大溝1群2号横穴からは、7世紀末~8世紀の土器を出土し、この時期まで下限を押さえることができる。また、有明海沿岸でも「貝床」が存在するが東京湾沿岸地域より先行している。

さらに、小沢氏は、「貝床」の理由について、3つほど想定し、貝が人骨の下に遺存している例があることから、遺体の保存という可能性、また、海との関連から、海上交通を支配する豪族層やそれに関係する階層の埋葬形態、さらに、海の民にとって貝は、玉石とともに清淨あるいは海への回帰を意味するなどの可能性を指摘している。

いずれにしても、「貝床」とした葬送儀礼の方法

が、地域や季節的な差異はあるものの貝が調達できる地域や時期には、ハマグリなどの貝類を副葬することが捉えられた。さらにこの儀礼は、6世紀末から7世紀前半を中心とし、8世紀初頭段階の時期まで行なわれていたことが明らかとされた。

(2) 集落遺跡出土の貝

古墳時代に貝を出土する遺跡にはどのような遺跡がこれまで知られているのだろうか、また、貝の出土する遺跡の立地や時期、さらには、出土状況について検討してみる。

埼玉県岡部町（現深谷市）宮西遺跡は、古墳時代の集落遺跡である。遺跡は、北側に小山川が流れ、南側に志度川が流れる合流点に近接した位置にあたる。小山川は、北武藏地域の中心河川であり、古利根川水系として東京湾岸からの交通要所でもある。貝を検出した遺構は、古墳時代後期の溝跡である。覆土からハマグリがまとまって出土した（註6）。

埼玉県深谷市幡羅遺跡第18次調査の廃棄土坑内からは、獸骨とともにハマグリをはじめとする海の動物遺存体が多量に出土し共伴する土器などから7世紀後半の時期と考えられる（註7）。幡羅遺跡は、古代武藏国幡羅郡の郡役所と推定されている。このため、役所の祭事の際に魚介類が調達された可能性が考えられる。幡羅遺跡は福川に面した段丘上に位置し、古利根川水系にあたる。

埼玉県熊谷市北島遺跡は、弥生時代・古墳時代から奈良・平安時代、そして中世に至る大規模集落である。遺跡南側には、星川が東流し、その支線が遺跡内に存在していたものと考えられる。北島遺跡の下流8kmの星川沿いには、さきたま古墳群が位置し、元荒川水系にあたる。

北島遺跡第19地点の低地帯から貝を検出した。この低地帯は、弥生時代から古墳時代後期まで維持されており、遺跡中央を南北方向に走る。低地帯のや

や南側の位置に、二箇所に手の平状の窪みがあり、ここに、多量の土器などと一緒に貝類が出土した。貝の種類は不明であるが、調査担当者によれば大きな貝が大量に出土し、ハマグリの可能性があったと見られる（註8）。第44号溝跡の河川跡、第423号溝跡および第199号溝跡から検出された土器は、第6図に示した。有段口縁壺と模倣壺、統比企型壺、高壺、鉢などが出土した。

このほか、北島遺跡第144号土坑からは、有段口縁壺とともにモモの種が大量に出土している。

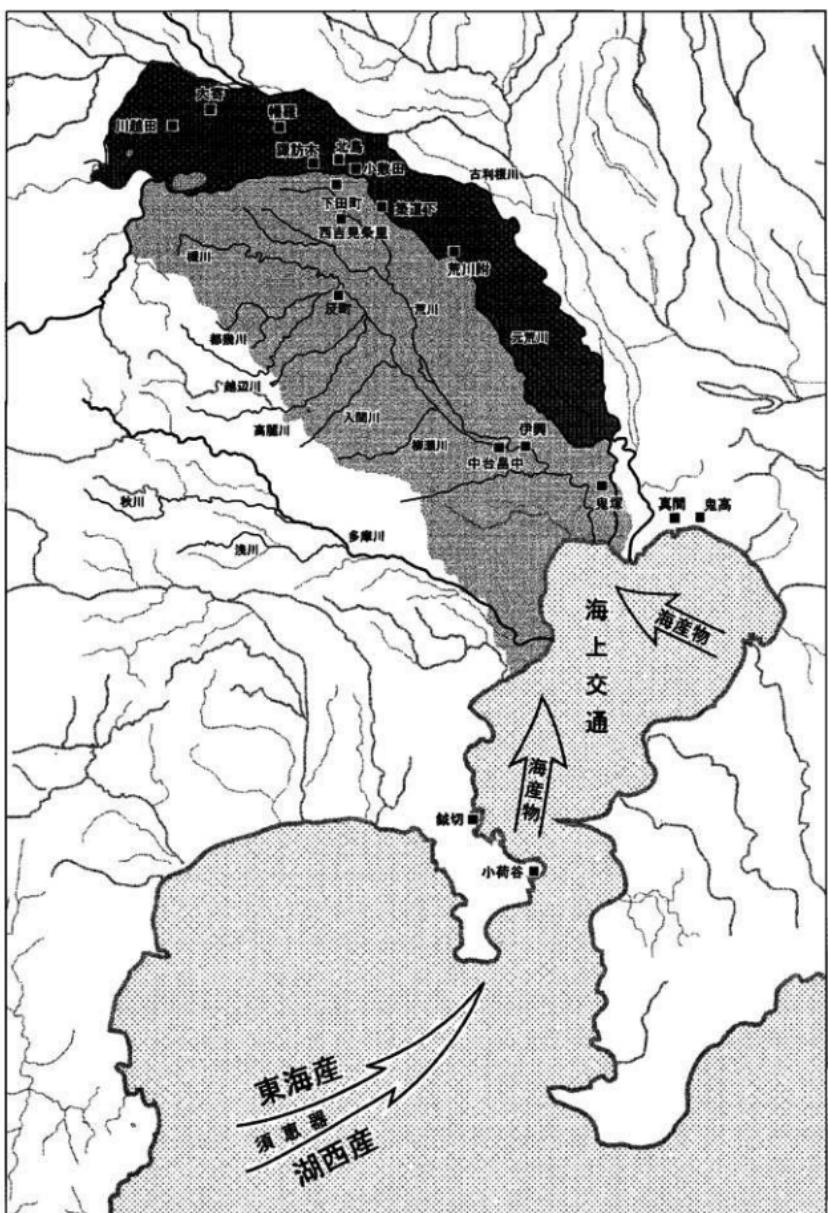
遺跡南側には、星川が東流する。この星川は、旧忍川と合流し、元荒川水系となり、東京湾岸に到る。また、旧忍川との合流地点は、さきたま古墳群の形成された地域であり。明らかに、さきたま政権との関連が重視される遺跡である。

埼玉県熊谷市諏訪木遺跡は、忍川と星川に挟まれた集落である（註9）。集落内には、蛇行した河川跡が検出されている。その中でも、河川跡B・C地点からハマグリやアサリなどの海の二枚貝が検出された。遺物の出土状況や時期も北島遺跡の低地帯や下田町遺跡第80号溝跡の出土状況と類似している。

河川跡B地点は、古墳時代後期の遺物が主体である。土師器有段口縁壺、統比企型壺、身模倣壺、北武藏型壺、高壺、壺、甕等を検出した。また、須恵器や木製品とともに、滑石製模造品、石製防錆車が出土している。さらに、獸骨では、ウマ、シカ、イノシシ、イタチ、イヌ、そして、魚骨を検出した。

河川跡C地点は、流路1と流路2の時期に分かれ。流路1の主体は古墳時代後期である。また、流路2の主体は奈良・平安時代である。流路1の河川跡B地点では、祭祀用具が検出されており、河川祭祀の場所と考えられている。

埼玉県蓮田市荒川附遺跡の古墳時代後期の住居跡の覆土中にはアサリと見られる貝が検出された。本



第1図 貝を出土する遺跡

遺跡は、元荒川の右岸に形成された大集落です。

このほか、埼玉県東松山市反町遺跡（註10）は、低地帯の自然堤防上にあたり、遺跡北側に都幾川が東流する。遺跡内には河川跡が蛇行して検出された。そのうちの、古墳時代前期の河川跡からハマグリが出土した。河川跡からは、土師器壺・壺・小形壺・塙などとともに、木製品や自然木も出土している。

埼玉県吉見町西吉見条里遺跡からは、多量の淡水産のカラス貝が出土している（註11）。貝は、第15号溝跡の堤状構造が残る下流部分から検出され、木製品、自然木が混在している。共伴する出土遺物は、古墳時代前期の五領期にあたる土師器の高杯・壺・塙などの破片が数点見られた。西吉見条里遺跡は、市野川によって形成された広大な低湿地の左岸にあたり、部分的に形成された自然堤防上に立地する。貝を出土した溝跡は自然流路を護岸改修などをした溝跡であり、規模は、上幅で約5.1m、深さ平均1.3mで壁は直線的に改修されている。

このように、海の貝を出土する古墳時代の遺跡は、河川の流域に位置することが確認された。

このほか、東京低地に立地する東京都足立区の伊興遺跡では（註12）、古墳時代後期にあたる時期の獸骨として、ウマ、ウシ、ニホンシカ、イノシシ、イヌ、タヌキ、イタチを検出した。また、キジ、コイ、サメの骨を出土している。さらに、種子では、モモ、スマモ、メロン類、ヒョウタン類、カボチャ近似種を認めた。

千葉県千葉市上ノ台遺跡は（註13）、繩文時代から奈良・平安時代までの複合遺跡であるが、古墳時代後期の集落は、漁村の可能性があると考えられている。このうち、3軒の住居跡の覆土中に貝塚を検出し、3D-56住居跡内貝層の出土貝類は、総計524点で、ハマグリが321点であった。このほかの貝は、シオフキ、マガキ、オオシジミであった。獸骨は、住

居跡からウマ、ニホンシカ、ウシを出土している。魚類は、軟骨魚綱のネズミザメ目が1種、硬骨魚綱のタイ科が2種出土している。

千葉県市川市鬼高遺跡は（註14）、須和田丘陵上の遺跡とは異なり、低湿地遺跡である。遺跡は杭木の散在する地帯と貝塚とで構成されていた。杭木の地帯からは、土器のほか土鍤、土玉、果実、獸骨、鳥骨、魚骨、魚鱗などを出土した。魚類の中には、マダイ、コチ、ヒラメなどの近海魚も見られた。また、貝塚は、1～2mの層に堆積し、ハマグリ、カキが主体である。

（3）文献資料の海産物や河川交通

ここで、文献資料から海産物や河川交通についての記録を見てみる。

平城宮跡から出土した木簡の中に、

「武藏国男衾郡余戸里大賛鼓一斗 天平十八年十一月」（平城宮木簡1の404号）

（表）「武藏国秩父郡大賛鼓一斗」（裏）「天平十七年」（平城宮木簡1の406号）

の二点の木簡があり、鼓（クキ）が貢納された記録が残されている。荒井秀規氏は、内陸の男衾郡や秩父郡から鼓が都に貢納されること、さらに鼓が、大豆と海草を原料として調理されたものであることに注目した（註15）。このことは内陸の男衾郡や秩父郡に海草が「流通」していたことを示す資料として指摘された。さらに、荒井氏は、「元荒川を通じて内陸部に運ばれた東京湾の海草と末野产須恵器が交易された可能性がある。」と述べている。

次に、万葉集の第14巻には、東歌が多く納められており、その中に見られる河川交通について見る。

河川交通の様子は、「埼玉の津に居る船の風をいたみ綱は絶ゆとも言な絶えそね」（3380）の歌に見られる。これは、現在の行田市にあたる、さきたまの津の様子である。時節の強風により停泊する船の綱が

ピンと張っている。船運で販わっている状況がわかり、おそらく、元荒川を行き来する船がさきたまの入江に停泊していた様子である。

また、「葛飾の真間の入江にうち麻く玉藻刈りけむ手児名し思はゆ」(0433)、「葛飾の真間の浦廻を漕ぐ船の船人騒ぐ波立ち」(3349)の歌がある。葛飾は東京都葛飾区、埼玉県北葛飾郡、千葉県市川市の江戸川の流域を示す。真間は、市川市真間のこととここに入江があったことがわかる。

さらに、「多摩川にさらす手作りさらさらになにぞこの子のこだ愛しき」(3373)の歌からは、多摩川で麻の布をさらしていた様子がわかり、多摩川が庶民の生活の中で日常利用されていたことが伺われる。このように、武藏地域の港湾の様子が垣間見られる。

今後、低地や湿地の調査にともない、河川跡や溝跡、井戸跡などから海の遺物が出土することに注目し課題としたい。

3. 三浦半島の遺跡

鉢切遺跡(註16)は、神奈川県横須賀市夏島に所在し、横須賀市(相模国)と横浜市(武藏国)との境にあたり、東京湾に面した入江状に深く入り込んだ平潟が形成された地域である。早くから赤星直忠博士の調査があり、その際に様々な動物遺存体が出土することで注目されていた。古墳時代前期では、祭祀場と考えられる小豎穴1箇所、貝塚1箇所が検出され、後期では、土師器に混じって貝殻や動物遺存体が検出されている。またこのあたりには、古墳時代末から奈良時代にかけて横穴群が存在する。

鉢切遺跡は、7世紀初頭の牛頭やイルカを生贋にした祭祀の跡を確認している。報告者の小出氏は、「牛頭祭祀」として遺跡の調査成果を位置づけた。

出土した土師器は、模倣坏、有段口縁坏、身模倣坏、統比企型坏、高坏、平底鉢などが出土している。

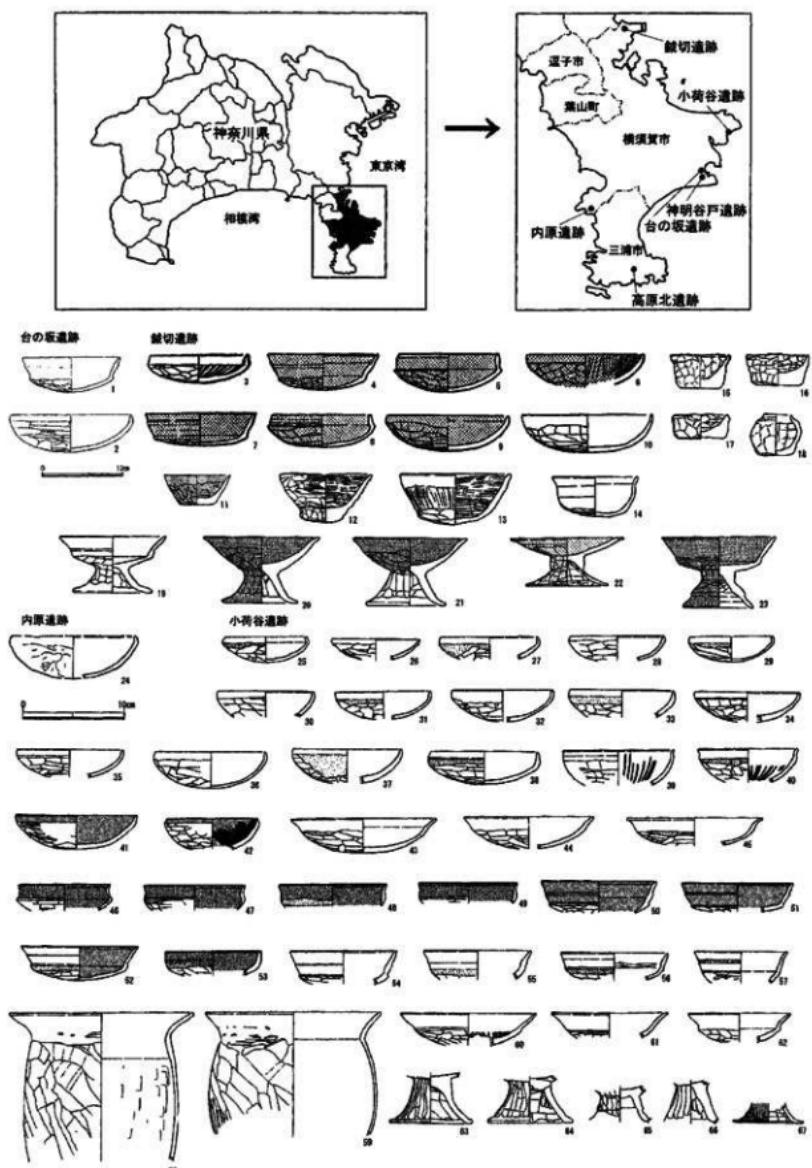
小荷谷遺跡(註17)は、横須賀市鴨居に所在し、浦賀水道西岸の鴨居湾に面した砂丘上に立地する。発掘調査の結果、古墳時代後期末から奈良時代初期の遣構確認面から多量の北武藏地域を主体的に検出される土師器坏、甕類が出土した。また、遣構は、掘立柱建物跡6棟、竪穴状遣構1基、柱穴列4条、土坑2基である。掘立柱建物跡は、調査区中央に検出した柱穴列を境に西側エリアに側柱建物跡が存在し、東側のエリアには東柱をともなう倉庫と見られる建物跡を検出した。西側エリアでは、3棟の建物跡を確認したがこの他に、多くの柱穴が検出されており複数の建物が存在していたものと考えられる。また、第6号掘立柱建物跡は、布掘り地業をもつ建物跡である。東側エリアには、2間×2間の倉庫跡が検出され、柱穴の掘り方内から模倣坏、統比企型坏、身模倣坏が出土している。

三浦半島の鉢切遺跡から出土した貝や動物遺存体は、下田町遺跡から発見された貝の種類と様相がかなり類似している。また、第2図は鉢切遺跡や小荷谷遺跡出土の土器である。両遺跡は、八割以上が北武藏地域の土師器で占められている。また、在地の土師器が認められず、三浦半島から出土する土師器は、いずれも搬入されたものである(註18)。

さらに、鉢切遺跡からは、魚労具である土鉢や骨鉢が出土し、漁労活動の遺跡として考えられる。しかも、これら地域で生産された魚介類が河川を利用し、多摩川、入間川、和田吉野川など西よりの内陸地域の遺跡にもたらされたと考えられる。

4. 模倣坏、有段口縁坏、統比企型坏の領域

7世紀初頭段階は、模倣坏、有段口縁坏、統比企型坏が主体である。(註19)さらに、このうち模倣坏と有段口縁坏は黒色処理を行なった坏が約2倍の出土量となっている。



第2図 三浦半島の土器

下田町遺跡大溝跡出土の土師器類を器種別に見ると、第2表に示した結果を得た。有段口縁坏が圧倒的に多く出土している。模倣坏A 31点、模倣坏B 16点、模倣坏C 7点、黒色模倣坏 68点、有段口縁坏 64点、黒色有段口縁坏 116点、身模倣坏 2点、統比企型坏 53点、北武藏型坏 4点である。第4図はこれらの土師器坏が持つ領域を概念的に表現したものである。模倣坏、有段口縁坏、統比企型坏は時期的に同時性がある。北武藏型坏は、後出の器種であり、この他、北武藏型暗文坏や北武藏型皿も後出の器種として出現し広く分布する。

北島遺跡 19地点の低地帯から出土した土師器は、図示された点数を数えると、模倣坏 9点、有段口縁坏 22点、黒色有段口縁坏 63点、身模倣坏 14点、統比企型坏 28点、北武藏型坏 49点である。これらの土師器坏とともに、湖西産の須恵器坏日々と一緒に出土する。

小荷谷遺跡の出土遺物は北武藏地域の土師器坏でほぼ占められている。若干他地域の土師器が混在するものの、在地の土師器は認められていない。しかも、出土する土師器の時期幅が存在していることも、特徴のひとつである。古い段階は第6図1~4の模倣坏であり、6世紀後半段階ととらえることができる。新しい段階は第6図12の北武藏型坏や北武藏型皿を検出しており8世紀初頭である。この段階までは、古墳時代的土器の分配と交易が河川を媒体として広く展開していたことがわかる。しかし、8世紀初頭の段階を契機に北武藏地域の土師器の供給が停止し、南北企座須恵器の出土が認められる。

和田吉野川水系の青山古墳の所在する大里地域や比企地域、入間地域は、丘陵部を中心に比企型坏が分布している。一方、元荒川水系や古利根川水系のさきたま古墳群を中心とするさきたま地域には、有段口縁坏が勢力的な広がりを持ち分布している。

これらの地域の土師器坏の領域との関連を考えると、大里地域とさきたま地域は、比企型坏と有段口縁坏の分布が重なり合う地域であり、いずれの領域の土師器坏を出土する地域となっている。

鉢切遺跡や小荷谷遺跡出土の7世紀後半から8世紀初頭段階の須恵器は、湖西産が見られるものの、北武藏の土師器供給を受けながらも末野産須恵器の出土は認められなかった(註20)。このことから、この地域との交易関係は、北武藏地域・大里地域や比企地域、入間地域で生産された土師器との関係が想定され、須恵器の関連は認められない。

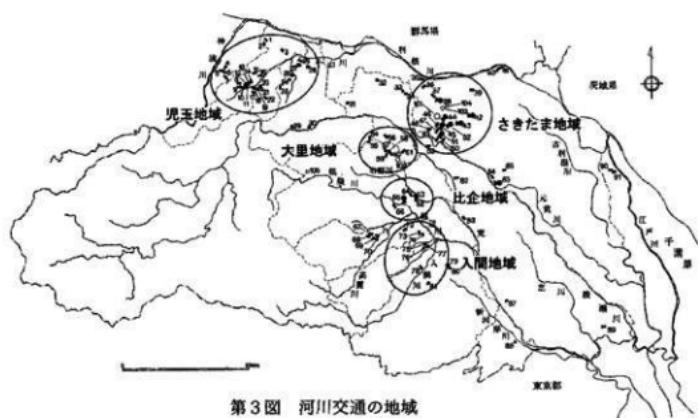
塙田氏は、真名板高山古墳の歴史的意義を考える中で、「さきたま古墳群の形成された地域は、群馬県方面への利根川、秩父方面への荒川がもっと近接する場所である。また、両河川は東京湾へと通じている。さらに、星川や忍川などの小河川が流れ、海上交通の要衝の地として押さるべき地域である。」と述べている(註21)。また、古墳時代に、利根川の水運によって榛名山に産する角閃石安山岩が天王山塚古墳に使われたり、荒川の水運によって長瀬の緑泥片岩が小見真親寺古墳や千葉県木更津市金鈴塚古墳に使われ、逆に東京湾から荒川をのばって、千葉県富津市金谷付近の海岸で採れる房州石がさきたまの将軍山古墳に使用されている。このように水運の重要性を指摘している。

また、野本將軍塚古墳の所在する市野川・都幾川の比企地域や牛塚古墳の所在する越辺川・入間川の入間地域が存在し、統比企型坏が分布する。

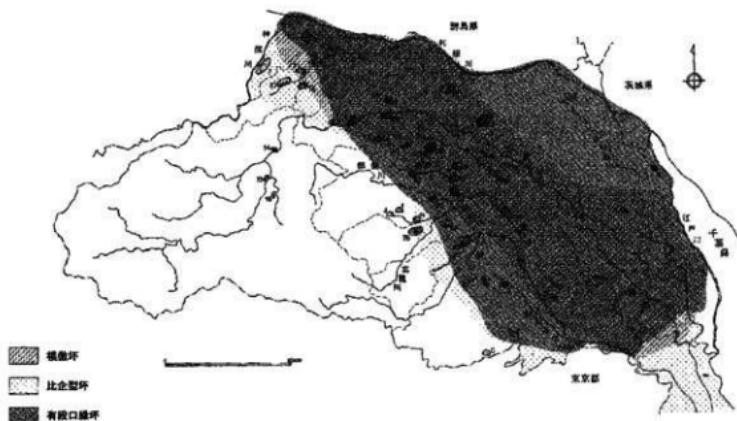
さらに、利根川の支流である小山川流域の児玉地域を中心として模倣坏が分布する(註22)。

5.まとめ

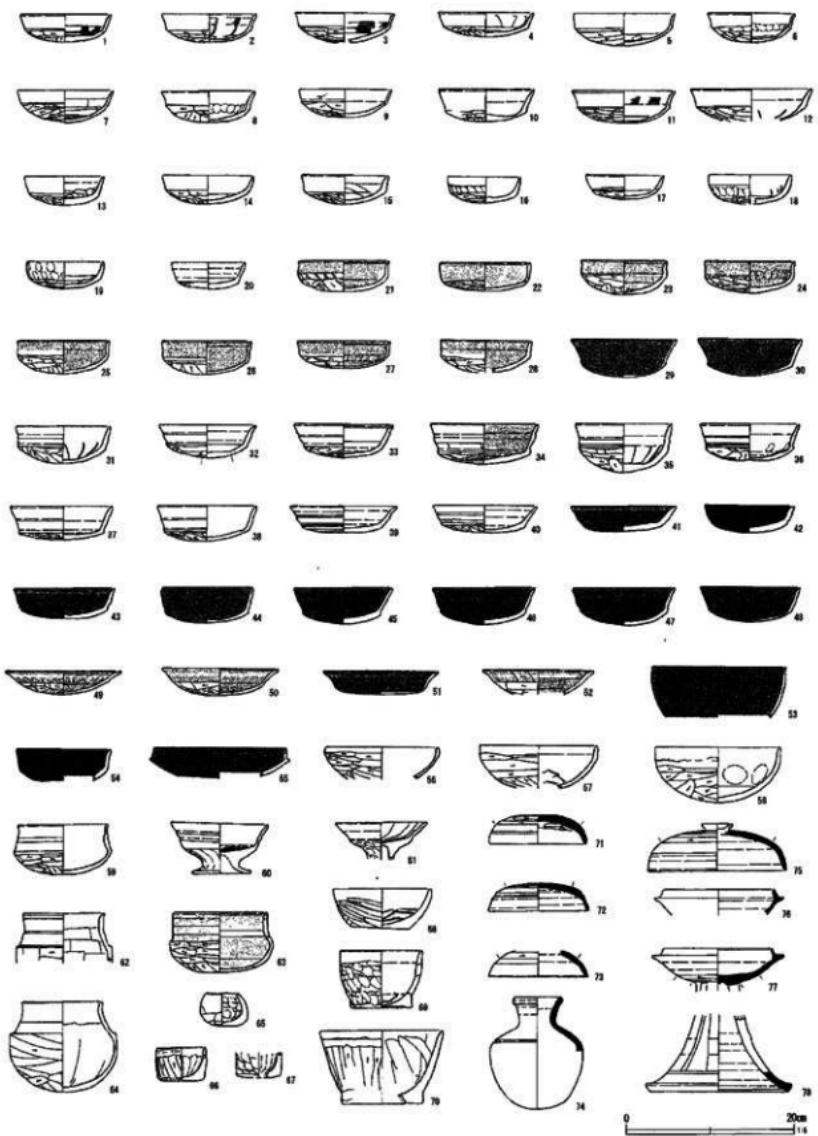
遺跡から出土する他地域の土器は、瓶や壺・甕、そして、蓋坏の容器が主体的である。このことは、内



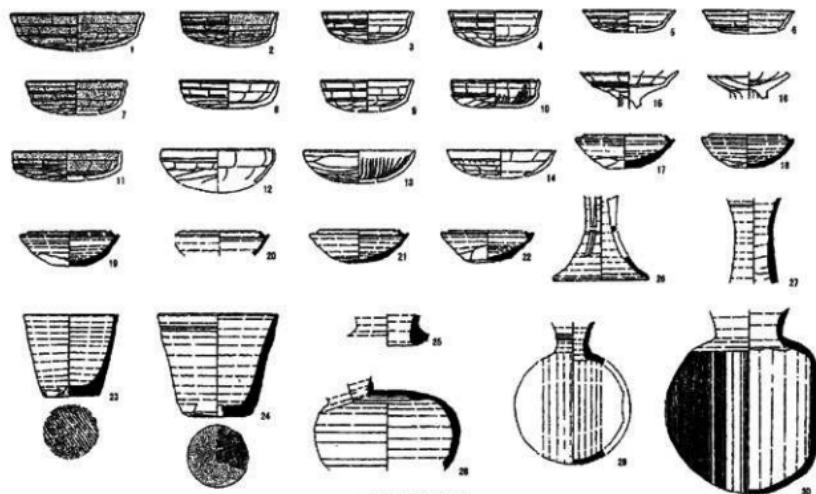
第3図 河川交通の地域



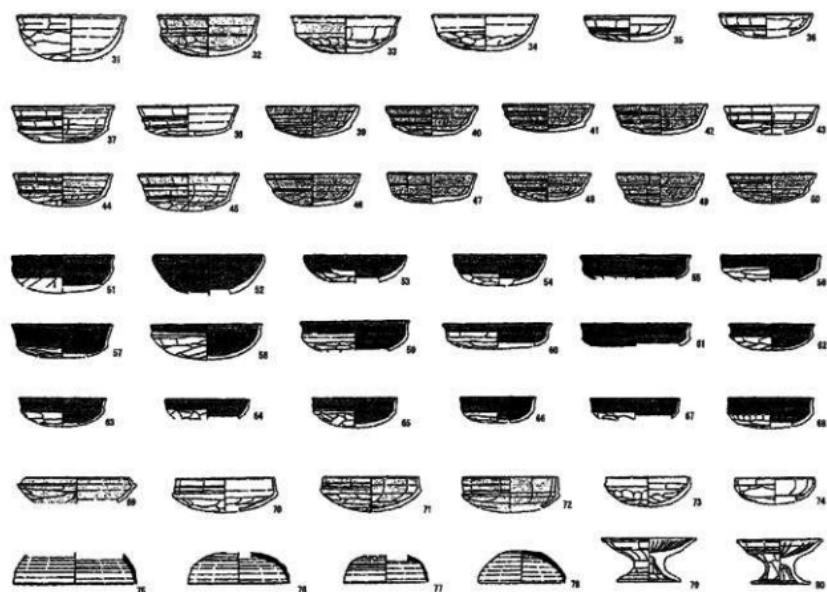
第4図 土師器杯の領域（杉崎 1992 より作成）



第5図 下田町遺跡第80号溝跡出土遺物



第109号溝跡出土物



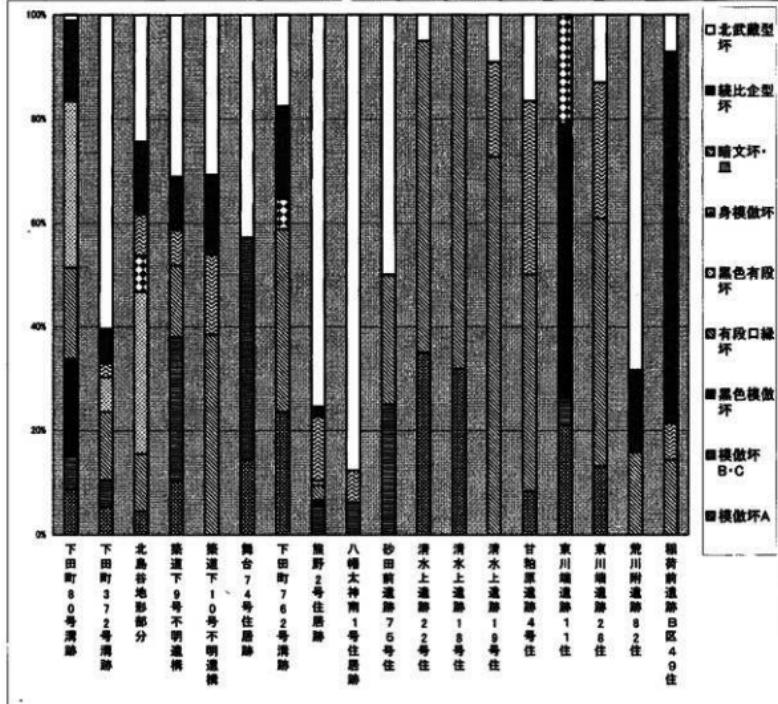
上部集中出土地点の出土物

第6図 北島遺跡出土遺物

1 cm

第2表 土師器坏分類別組成表

番号	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18
遺跡・遺構名	下田町 80号溝跡	下北島 谷地形部分	築道下 9号不明遺構	築道下 10号不明遺構	舞台 7号溝跡	下田町 7号溝跡	熊野 2号住居跡	砂田前 7号溝跡	清水上 7号溝跡	清水上 8号溝跡	清水上 9号溝跡	甘粕原 8号溝跡	東川端 9号溝跡	荒川附 8号溝跡	荒川附 8号溝跡	荒川附 8号溝跡	福荷前 9号溝跡	
横倣坏A	31	14	9	3		1	4				7	7	1	4	3			
横倣坏B-C	23	13	8		3		6	4	2					1				
黒色横倣坏	68						1							10				
有段口縫坏	64	34	22	4	5	6	3		2	12	15	8	5		11	3	2	
黒色有段坏	116	17	63				1											
身横倣坏	2		14				1							4				
暗文坏・皿	1	7	16	2	2			13	4			2	4		6		1	
継比企型坏	53	17	28	3	2		3	2							3	10		
北武藏型坏	4	156	49	9	4	3	3	80	57	4	1		1	2	3	13	1	



容物を入れた容器として移動したと想定される。海産物を交易する地域からは、特産物を交易するための壺や甕を容器として、海水を入れた中にハマグリを納め、河川交易により内陸部に運搬したと想定した。湖西産の甕や在地の土師器甕などが利用されたことだろう。このほかにも、湖西産などの瓶類が内陸部の横穴や集落遺跡から検出される。7世紀後半になると、甕Hや甕Bの甕蓋などが出土し、容器として使用されたか可能性も考えられる。

古墳時代の生業活動によって手にした海産物を広域に流通させ、交易活動を行なっていた実態が下田町遺跡で把握できた。その仕組みには、まだまだ解明すべき点は多いが、ここでは、海産物が内陸部の遺跡に河川を利用して運ばれていたことを指摘した

い。また、海産物の残骸が土器とともに大量に一括投棄されていることから、儀礼や祭礼などの際に確保したものと考える。このような、社会背景には、古墳時代後期に勢力を持つ在地首長が、各河川を把握することにより、交易権を手にしたことが考えられる。さらに、三浦半島や東京湾沿岸、多摩川流域などの河川交易に、介在したものがどのような勢力によるものか、北武藏と南武藏の関係など含め今後の課題としたい。

最後に、本稿を草するにあたり、中三川昇、稻村繁、富田和夫、大谷徹、宅間清公各氏にはご指導賜りお礼申し上げます。また、兵ゆり子さんには下田町遺跡の整理から草稿にいたるまで大変お世話になりました。ここに改めて感謝いたします。

註

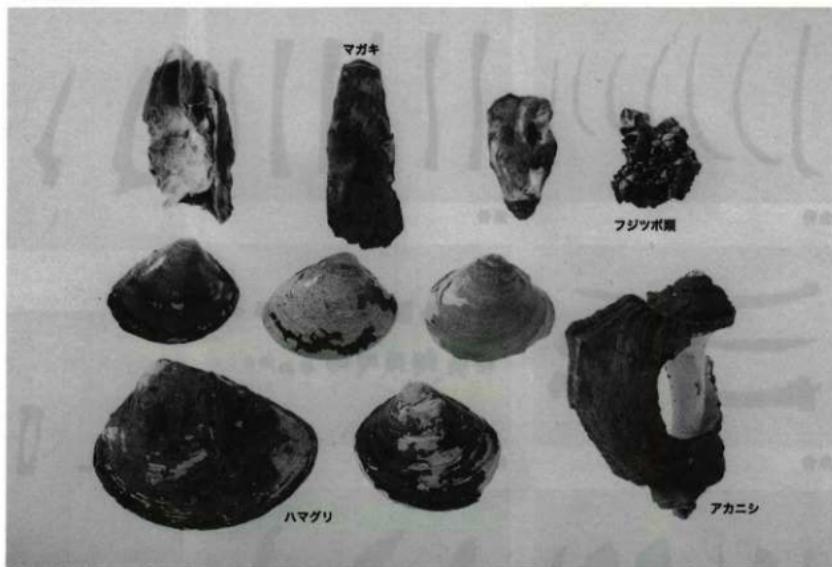
- (1) 赤熊浩一・岡本健一 2004 「下田町遺跡Ⅰ」埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第296集
赤熊浩一・松岡有希子 2005 「下田町遺跡Ⅱ」埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第301集
赤熊浩一・瀧瀬芳之 2006 「下田町遺跡Ⅲ」埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第319集
中山浩彦・磯崎一 2006 「下田町遺跡Ⅳ」埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第320集
- (2) 下田町遺跡出土の貝類の分析はパリノサーベイに委託し、金子治昌氏の同定結果を使用している。報告内容は「下田町遺跡Ⅰ」に所収されている。
- (3) 小林行雄 1976 『古墳文化論考』「黄泉戸喫」 平凡社
- (4) 木村幾多郎 1990 「古墳出土の動物遺存体(上)」『九州大学文学部九州文化史研究紀要』第35号
- (5) 小澤重雄 平成4年「貝床」をもつ古墳・横穴について」「古代」第93号 早稲田大学考古学会
- (6) 宮西遺跡の発掘調査所見では、溝跡の覆土中からやや大型の貝類が出土した。
- (7) 深谷市教育委員会知久裕明氏のご教示による。土坑内の土壁について現在ウォーターセパレーションを進めている。また、検出された動物遺存体については分析を行なっている。これまでに明らかなものは、貝では、ハマグリ・アカニシ・骨類の内、動物ではシカ・鳥類では、カモや中型の鳥、魚類では、タイ・サケ・マス・コイ・イワシが確認されている。
- (8) 北島遺跡の調査担当者の調査所見では、多量の土器類とともに、貝類が出土していた。
- (9) 吉野 健 2001 『隠防木遺跡』熊谷市遺跡調査会埋蔵文化財報告書
- (10) 反町遺跡は、現在埼玉県埋蔵文化財調査事業団によって発掘調査が進められている。第38号溝跡の覆土中から古墳時代前期の遺物に混じって点数は少ないものの貝を検出した。貝はハマグリの可能性が高い。
- (11) 弓 義明 2005 「西吉見条里遺跡」吉見町埋蔵文化財調査報告書第2集 吉見町教育委員会
- (12) 足立区伊興遺跡調査会 1997 『伊興遺跡』
- (13) 千葉県教育委員会 1981 『千葉・上ノ台遺跡』(付属)
- (14) 市川市 1970 『市川市史』市川市史編纂委員会
- (15) 萩井秀規 2006 「文献から見た土器の流通—商品としての須恵器—」『古代武藏国須恵器流通と地域社会』埼玉考古別冊9
- (16) 長谷川厚 1986 『鉢切遺跡』横須賀市文化財調査報告書第12集 鉢切遺跡調査団
- (17) 中三川昇 1994 『小荷谷遺跡』横須賀市文化財調査報告書第3集 横須賀市教育委員会

- (18) 横須賀市教育委員会の中三川昇、稻村繁尚氏には小荷谷遺跡、鉢切遺跡の資料を実見させていただき感謝申し上げます。また、この地域では在地の土師器生産は行なわれず、いずれの土師器も搬入されたことをご教示いただいた。また、稻村氏は、搬入に際し、河川交通というよりも陸路交通を指摘され、群馬の埴輪や横敷瓦、純正企型瓦が搬入されるルートは丘陵沿いの陸路を重視している。
- (19) 田中広明 2004 「それからのさきたま」『幸魂』—増田逸郎氏追悼論文集—北武藏古代文化研究会
田中広明 1991 「古墳時代後期の土師器生産と集落への供給」『埼玉考古学論集』財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- (20) 赤熊浩一・大谷徹 2006 「古墳時代の須恵器窯の流通とその実態—末野窯跡ー」『古代武藏国の須恵器流通と地域社会』埼玉考古別冊9
- (21) 塚田良道・中島洋一 1997 「行田郷土博物館研究報告」第4集 「真名板高山古墳の再検討」行田市郷土博物館
- (22) 杉崎茂樹 1992 「北武藏における古墳時代後・終末期の諸様相」『国立歴史民俗博物館研究紀要』第44集

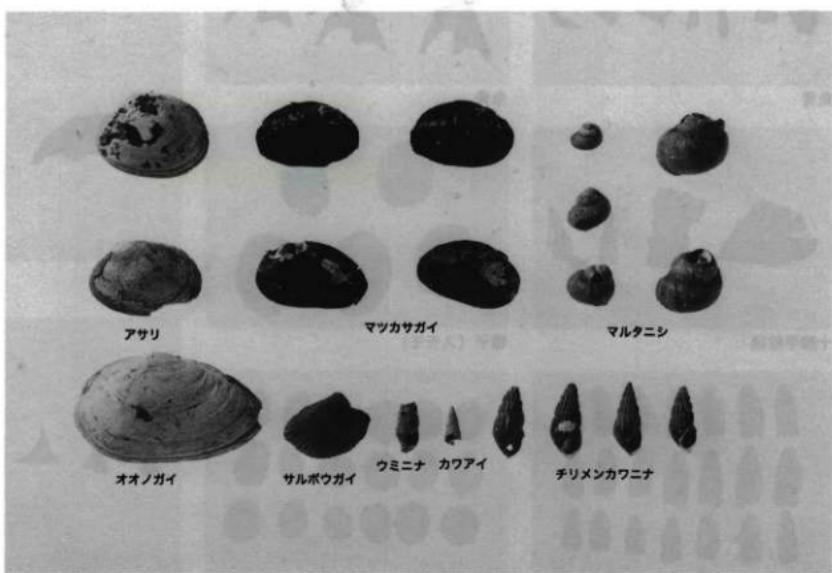
第3表 下田町遺跡出土貝類の計測値

種類	左右	部位	数量	計測値 (mm)			
				部位	最小	最大	平均
ハマグリ	左	殻	112	殻長	24.60	111.00	55.67
		殻	195	殻長	24.16	98.29	52.09
アカニシ	本体	5		殻高	93.21	123.04	111.50
マガキ	左	殻	3	殻長	50.00	85.00	-
		殻	2	殻長	63.33	95.66	-
マルタニシ	本体	93		殻高	6.81	33.71	17.26
チリソンカワニナ	本体	609		殻高	9.69	35.30	20.21
マツカサガイ	合貝	20		殻長	24.43	44.44	38.13
	左	殻	83	殻長	26.91	49.83	38.76
	右	殻	75	殻長	26.62	48.00	36.92
ウミニナ	本体	1		殻高	22.00	-	-
カワアイ	本体	1		殻高	17.00	-	-
サルボウガイ	右	殻	1	殻長	-	-	-
アサリ	左	殻	2	殻長	48.91	49.10	-
オオノガイ	左	殻	1	殻長	80.45	-	-

写真図版 1



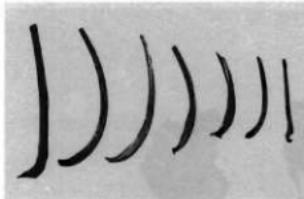
貝殻



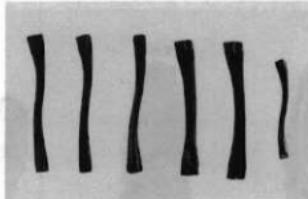
下田町遺跡出土の貝

貝殻

写真図版2



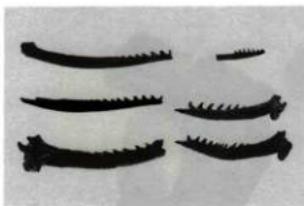
魚骨



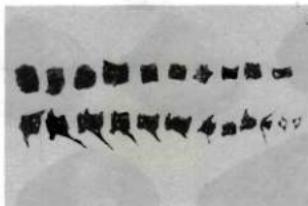
魚骨



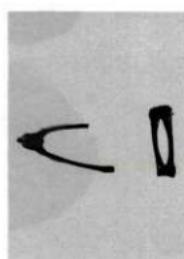
魚骨



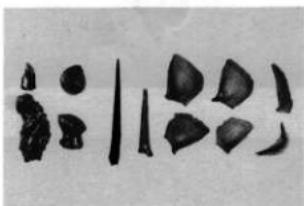
魚骨



魚骨



カエル



魚骨



魚骨



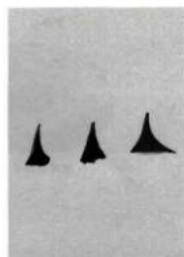
ハタネズミ



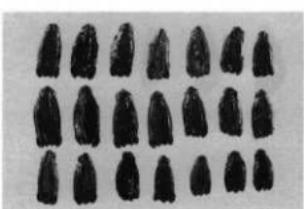
十脚甲殻類



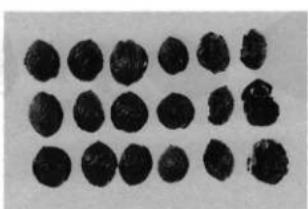
種子（スモモ）



種子 バラ科（トゲ）



種子 ウリ科（ユウガオ？）



種子（モモ）

研究紀要 第21号

2006

平成18年6月20日 印刷

平成18年6月27日 発行

発行 財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団

〒369-0108 熊谷市船木台4-4-1

電話 0493-39-3955

<http://www.saimabun.or.jp>

印刷 誠美堂印刷株式会社